

ジャーナリストのユーザビリティを考慮した記事検索インターフェースの設計 -検証作業の支援に向けて-

竹田 知佳

今日、日本における新聞発行部数は1日に5,000万部を超えており、ほぼすべての世帯が新聞を購読している。従って、新聞は我々の生活と密接に関係しているメディアと言える。新聞の記事を作成するジャーナリストは記事を作成するときに自社の記事検索システムなどを使って、情報を集めながら仕事をしている。ジャーナリストの情報探索行動に関するSimonの研究がある。Simonはジャーナリストが情報探索を使うタスクとして、新規性の確認、理解の促進、コンテンツの発見、情報の集積の4つを定義した。しかし、ジャーナリストの役割は記者、編集者、整理部（関門）の大きく3つの役割があるが、Simonの4つのタスクとの関係が解明されていない。従って、Simonの4つのタスクとジャーナリストの3つの役割の関係を明らかにすることを本研究の1つ目の目的とした。2つ目の目的としてタスクや役割を考慮した検索インターフェースの設計をすることにした。

1つ目の目的のために某通信社の記者職、編集者、整理部（関門）の方々にアンケート調査を行った。結果として、3つの役割によって4つのタスクの比重に多少の差はあるものの顕著な違いは見られなかった。一方でどの役割も新規性の検証を検索目的の1つにしていることが分かった。従って、第2の目的として特に記事内容の検証の支援に着目した。

本研究ではインターフェースの設計にUCD(user centered design)の手法を用いた。UCDとは製品を開発する一步一步において、ユーザーを考慮する手法である。具体的にはジャーナリストに対してのアンケートやインタビューを行い、これらをもとにシナリオを作成し、記事検索システムに対するニーズを取り出した。ニーズに対するアイデアをペーパープロトタイプを作成しながら練っていった。一連のインタビューを通して、今回対象としたジャーナリストが、言い回しの検証、定義、説明の正確さの検証、日時、固有名詞などの検証、主観的であるかどうかの検証、新規性の検証の主に5つの検証を行っていることが分かった。これに基づき5つの検証が行えるインターフェースのモックアップを作成した。新規性の検証に関しては、類似した記事を比較することで、何らかの新しい情報を見つけ出すことができると考えた。新しい情報を見つけだすやすくするために重複したキーワードや日付にハイライトを加えるデザインを考え、モックアップを作成した。

ハイライトされた記事の新規性の確認に対する効果を検証するために、被験者実験を行った。その結果、作業時間、正答率共にハイライトされた記事の効果は特に見られなかったが、アンケートではハイライトのある記事の印象が良かった。従って、新規性の確認を含む記事の検証作業の効果的な支援に関して、更なる調査が必要と考えられる。

今後の方向性として、より効果的な検証作業の支援システムの設計と開発、そしてその評価が考えられる。

(指導教員 上保 秀夫)